

吉澤延隆 箏リサイタル
—展開—

2009年11月5日(木)

18時30分開場／19時開演

古賀政男音楽博物館内 けやきホール

—プログラム—

Intermezzi II

望月 京 作曲

見えない糸

轟 千尋 作曲

箏：吉澤 延隆

三味線：野澤 徹也

尺八：神 令

三つの悲歌 —箏のために—

新実徳英 作曲

—休憩—

Luminous Flux

村瀬晴美 作曲 [委嘱初演]

覲(かむなぎ) ～十七絃箏と打楽器のための～

西村 朗 作曲

十七絃箏：吉澤 延隆

打楽器：山口 恭範

ごあいさつ

本日はお忙しい中、ご来場くださりまして、誠にありがとうございます。

この度、「吉澤延隆 箏リサイタル—展開—」と題しまして、現代日本の作曲家による作品を集めたリサイタルを開催させていただくこととなりました。

本日のリサイタルを迎えるにあたり、これまでご指導くださいました諸先生方をはじめ、皆々様のあたたかいご指導、御支えに心より御礼申し上げます。

さらに、本日快くご賛助くださいました打楽器奏者の第一人者である山口恭範先生、三味線奏者の野澤徹也氏、尺八奏者の神 令氏、新作の委嘱を快くお引き受けくださいました村瀬晴美氏、ご協力いただきましたスタッフの皆様に、改めて心より御礼申し上げます。

本日のプログラムにある、作曲家の方々の作品の面白さや、奥深さが十分に伝わるよう、精一杯演奏いたします。

今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう謹んでお願い申し上げます。

吉澤 延隆

Intermezzi II

望月 京 作曲

《インテルメッツィ》という私の作品シリーズは、フランスの思想家であり、文芸批評家でもあった罗兰・バルト（Roland Barthes 1915-1980）の断章形式についての考察から発想を得ています。彼は、一見無関係に見える数々のテーマを思いつきのように断章形式で書き連ねることによって、それらのあいだに隠されたつながりが次第に浮き彫りになることを次のように表現しています。

『断章によって書くことは、円周上に小石をならべていくようなもの、その円の中に私は身をさらけ出す。（並べられた小石のように）粉々に砕かれた私のささやかな宇宙、描かれた円の中心には一体何が現れるのか？』

また、断章の理想は、高度の音楽的濃縮性や、各断章の節回しや連結法といった「音色」によって支配される強いレトリック性であると述べ、俳句を引き合いに出すとともに、こうした断章の美学をもっともよく理解し、実践した作曲家としてシューマンとヴェーベルンを挙げています。

私の《インテルメッツィ》は、こうしたバルトの思考を音楽の上で探求したものです。いくつかの短い断章が「小石を並べるように」続けて演奏されますが、そうして描かれた円の中心に、いかなる私のささやかな音楽宇宙がたちのぼるものでしょうか。（望月 京）

見えない糸

轟 千尋 作曲

邦楽器でヨーロッパスタイルの音楽を書くにあたり、弦楽器郡の「余韻」と、邦楽特有の「間」をどう扱うかが、私の中で一番の課題になっていました。

「余韻」「間」「前の音が消えてから次の音が鳴るまでの時間」は、音楽が停止しているのではなく、むしろ音楽が押し進められる精神的なもの、細くて見えないけれど、強くぴんと張った糸のような緊張感が存在するような気がしています。

この作品で、「余韻」や「間」の時間的な対比による、音楽の推進力や緊張感の違いを表現してみようと思いました。

「余韻」と「間」そのものを主の素材とした序奏から始まり、箏のオスティナートの上に尺八によるテーマが提示されます。三味線もオスティナートに加わり、3者が次第に反応しあいながら進んでいきます。

「余韻」「間」に焦点をあてた前半部と対照的に、後半からはリズムオスティナートによって「音の隙間」を許す事なく、絶えず素材同士が掛け合うことで音楽が進んでいきます。

終盤これまでの要素が全て重なりクライマックスに向かい、曲の最後、様々な音色がまざった余韻によって、曲が閉じられます。（轟 千尋）

